



天気を気にせず楽に施肥できる 水稻の流し込み施肥法

技術の特徴と成功のための重要ポイント

全農 耕種総合対策部 営農・技術センター 肥料研究室
(現 全農 耕種資材部 東日本営農資材事業所 肥料課)

竹内 智

水稻の省力技術として、肥料を水口からかん漑水とともに直接投入する“流し込み施肥”が普及している。水田に入らずに施肥できるため、暑い時期の追肥作業を省力化できる技術である。天候や生育に応じた適切な追肥の実施による高品質安定生産をめざす施肥法として注目されている。

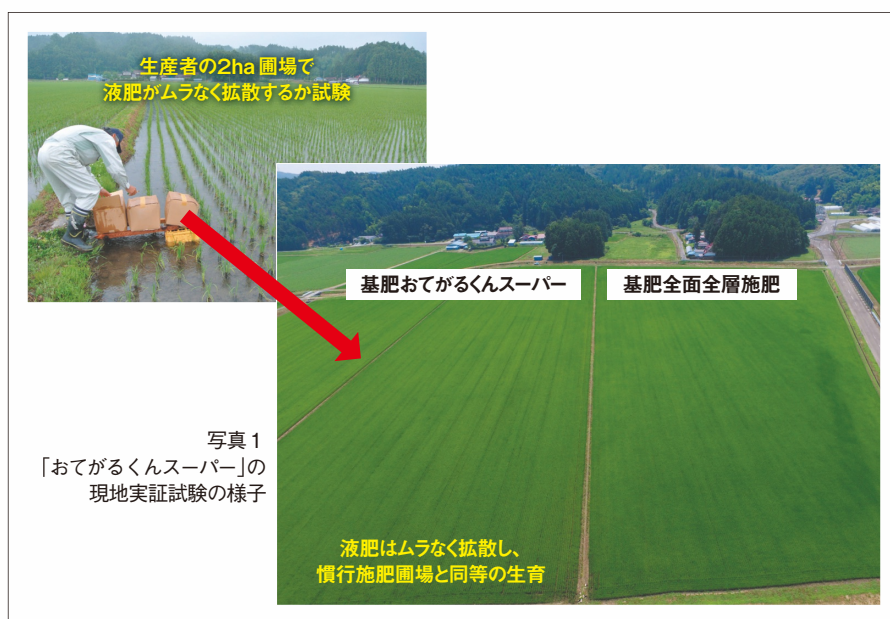
全農では、この技術を基肥でも使用できるよう液体肥料「おてがるくんスーパー」（特許第6999915号）を開発した（写真1）。これにより、水稻の流し込み一貫施肥体系を確立し、被覆肥料の代替施肥技術としても注

目されている。しかし、流し込み施肥は、適切な方法で行わないと施肥ムラができるおそれがあり、収量や品質の低下につながってしまう。ここでは、流し込み施肥の特徴および均一に施肥するためのポイントを紹介する。

流し込み施肥はこんな方にオススメ！

流し込み施肥は「真夏に水田に入ることなく追肥をしたい」「施肥作業時間を短縮したい」「天候を気にせず適期に追肥をしたい」と考えている方にオススメの技術である。猛暑の夏や降雨中に動力散布機（動散）などを背負って行う施肥作業は重労働である。流し込み施肥は、天気を気にせず、水田に入ることなく楽に施肥できることが大きな特徴である。流し込み施肥を行った場合の単位面積当たりの作業時間は、慣行の動散を使用した施肥に比べて80%短縮された結果も得られている（図1）。流し込み施肥は、肥料を水口にセットするだけで、その後の作業がないため、同時に複数の水田で施肥することができる。

基肥でも使用可能な液肥が開発されたため、流し込み施肥は「耕うん・代かきなど作業が多い時期の基肥施肥



作業を減らしたい」という方にもオススメである。大規模経営では、春先に作業が集中するため、作業の都合で移植のかなり前から施肥することがあり、栽培中の肥料切れが懸念される。流し込み施肥を導入すれば、移植後に施肥するなど基肥時期の融通が利くため、作業を分散させることが可能となる（図2）。

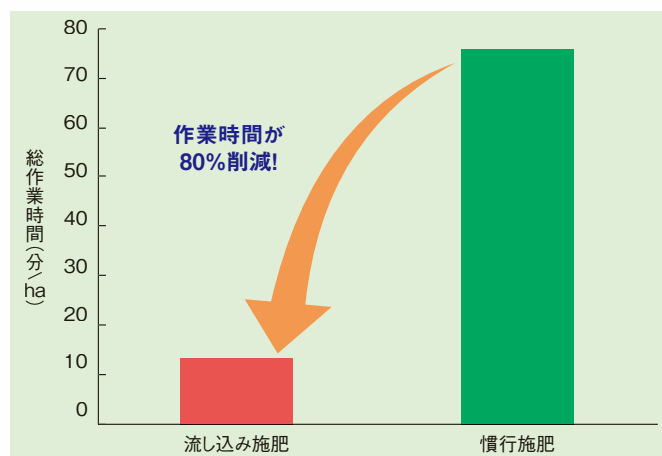


図1 追肥時における流し込み施肥および慣行施肥(動散)に要した総作業時間

宮城県大崎市の2.2ha 圃場で行った試験

作業時間：肥料の運搬、準備、施肥の際に作業を行った時間の総和

